錢形平次捕物控

お銀お玉

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、變な事があるんだが――」

ガラツ八の八五郎が、鼻をヒクヒクさせ乍ら來たのは、後の月が過ぎて、江戸も冬仕度に忙しいある朝のことでした。

「手紙が來たんだらう、恐ろしい金釘流で、――兩國の蟹澤のお銀が死んだのは唯事ぢやねえ。葬ひの濟まぬうち、檢屍を頼む――と斯う書いてある筈だ」

錢形の平次は粉煙草をせゝり乍ら、少し節をつけて言ふのでした。

「親分は、どうしてそれを？」

ガラツ八は眼を圓くし乍ら内懷を探つて居ります。

「千里眼だよ。八五郎の懷中などは悉く見通しさ。その手紙の入つて居る大一番の野暮な紙入の中に、質札が二枚と、一昨日兩國の獸肉屋で搔拂つた妻揚枝が五六本、それから寛永通寶が五六枚入つてゐる筈だ。大膽不敵だね、それで江戸の町を押し廻すんだから」

「ど、どうしてそんな事が分るんです、親分」

ガラツ八の眼の色が少し變ります。

「八五郎さん、騙されちやいけませんよ。此處へもそんな手紙が來たんですよ」

お靜はたまり兼ねてお勝手から助け舟を出しました。
「なんだ、つまらねえ。それならそれと、冒頭(はな)つから言へば宜いのに」
「種を明かしちや、どんな手品だつてつまらなくなるよ。——ところで、蟹澤一座のお銀といふのをお前は知つて居るのか」
錢形平次は漸(やうや)く眞面目な話に還(かへ)りました。
「江戸中で知らないのは錢形の親分ばかりだ。兩國一番の人氣者で、いやその綺麗なことと言つたら」
「馬鹿だなア、涎(よだれ)を拭きなよ。兩國の輕業(かるわざ)小屋の女太夫に夢中になつて、立派な御用聞が毎日通つちや見つともないぜ」
「毎日は通ひませんよ、精々三日に二度」

「呆れた野郎だ。それほど執心(しふしん)なら飛んで行くが宜い。お前が顔を見せなきやお銀も浮ばれまい」

「だから親分も行つて下さいよ。兩國は石原の利助親分の繩張りだが、利助親分は相變らず床に就いたつ切りで、可哀さうにお品さんが獨りで氣を揉んでゐる」

「お品さんのせゐにして、俺をおびき出す氣だらう。まア宜いや、行つて見よう」

「有難てえ」

ガラツ八はいそ〳〵と先に立つて案内するのでした。

蟹澤一座といふのは、その頃軒を並べた兩國廣小路の見世物小屋の一つで、座主の百太夫(ひやくだいふ)といふのは、大した藝ではありませ

んが、お銀、お玉の二人の娘太夫が評判で、その上品な美しさが、評判になつて居りました。

姉のお銀は十九か二十歳、歌が巧(たく)みで、踊りの地もあり、身輕な藝は不得手ですが、水藝や小手先の手品、さう言つたもので客を呼び、妹のお玉の方は十六七、これは輕捷(けいせふ)な身體が身上(しんしやう)で、綱渡りから竹乘り、撞木(しゆもく)飛び、人のハラハラするやうな危ない藝當が得意でした。

お銀の優しく愛くるしいのに比(くら)べて、お玉は色の淺黒い品の良い顔立ちで、姉妹といふ觸れ込みですが、どこかひどく違つたところがあります。座主の百太夫は大袈裟(おほげさ)な道化た調子で人を笑はせますが、大した藝のある男ではありません。四十がらみの、少

し肥つて來た身體が、藝の邪魔をしてゐるのでせう。百太夫の女房お徳は、三十五六の達者な女で、これは三味線も掻き鳴らし太鼓も叩きのめし、下座の鳴物ひと通りは何でも間に合はせる調法者、青黒い額(ひたひ)に疳癪筋(かんしやくすぢ)がピリピリと動いてゐる種類の大年増です。

錢形平次と八五郎が行つたのは、もう晝近い頃、蟹澤の小屋は木戸を閉めて、裏には石原の利助の子分達が二三人、嚴重に見張つて居ります。

「錢形の親分、丁度宜い鹽梅でした。兎も角も死骸を持出すのを止めて置きましたよ。百太夫の家は緑町なんださうで、小屋から葬(とむら)ひは出し度くないつて言ひますが――」

「石原の兄哥のところへも、變な手紙が行つたんだね」
「それでやつて來ましたが、檢屍をお願ひしてありますから、追付け旦那方が見えるでせう」
「そいつは宜い工合だ。ちよいと檢屍前に見せて貰はうか」
平次は裏から小屋へ入つて行きます。

二

「錢形の親分さん、入らつしやいまし」
薄暗がりから、大鹽辛聲（おほしほからごゑ）を掛けたのは、木戸番の傳六といふ三十男でした。

澁紙色に焦けてさへゐなければ、顔立も尋常ですが、手足と顔の外は、寸地も白い皮膚のない大刺青の持主と後でわかりました。

平次一行の姿を見ると、脅えたやうにコソコソと物蔭に隠れたのは、横幅の方が廣い怪奇な人間。これは萬之助と言つて、口上言ひの一寸法師です。もう三十五六にもなるでせうが、一寸見は十七八とも見える幼顔で、舞臺へ白粉をつけて出るのが、何よりの樂しみと言つた、不思議な好みに引摺られて、ほんの食扶持だけで此の小屋に雇はれて居ります。

「御苦勞樣で御座います、錢形の親分さん」

たつた一つしかない樂屋の大部屋に、不味さうに煙草を喫んで

居た座主の百太夫は、平次の姿を見ると、引つ掛けてゐた丹前を滑らせて、それでも丁寧に挨拶するのでした。小肥りの強かさうな面魂ですが、舞臺から客を笑はせ馴れてゐるので、何處か小悧巧らしい愛嬌のある男でした。

「お銀が死んださうぢやないか」

「そのことで、落膽して居ります。この小屋に取つては大事な米櫃で、へえ」

「死に様が變だといふ話だが――」

「自害で御座いますよ、親分さん。なんだつて死に度くなつたか、あつしには見當もつきませんが、死にやうに事を缺いて、自分で舌を噛み切つたんで、へえ。早速お屆けをするとよかつたんです

が、小屋にケチがつくと、暫くは居喰ひをしなきやなりません、ツイその――」

百太夫の辯解は大分苦しさうでした。

お銀の死骸はその隣の小さい部屋に寢かし、百太夫の女房のお徳と、お銀の妹のお玉が側に附いて居ります。

平次は丁寧に線香をあげて、さて死骸の顔を覆ふ布を取りました。

「――」

ハツと平次も息を呑んだほどのそれは凄じさです。肉付の豊かな通つた鼻筋も、反り加減の唇の弧線も、夢見るやうな霞んだ眉も、美しいには相違ありませんが、蝋のやうな青白い顔は、恐怖

と苦痛に歪(ゆが)んで、二た眼とは見られない痛々しい表情です。それに舌を噛み切つたといふにしては、口中に大した脹(は)れもなく、唇を開けさせると、少しばかりの血溜りはありますが、舌の傷はさしたるものとも思へません。

「髪が濡(ぬ)れてゐるやうだが？」

平次は鬘下(かつらした)に結つた、死骸の頭のあたりを撫(な)でて居ります。

「少し汚(よご)れて居りますので、これに洗はせました」

百太夫は死骸の足の方に、泣き疲れて俯向(うつむ)いたお玉の方を指しました。これはお銀の妹にしては、色も淺黒く、柄も大きい娘ですが、顔立ちは非常に立派で、名ある歌舞伎(かぶき)役者にも比べられるでせう。尤(もつと)も力業にも似た輕業をするだけに、骨組肉付は、若い

娘にしては思ひ切つた見事さです。
「お前はお玉といふのだな」
「え」
「お銀とは本當の姉妹か」
「え」
「生れは何處だ、――親はどうしてゐる」
「生れは相州の厚木在で、兩親とも早く亡くなりました」
少し太いが、張りのある良い聲です。
「お銀は何時何處で死んでゐたんだ。よく訊き度いが」
「昨夜此處がはねてから、此の部屋の中で死んでゐましたよ。皆んな緑町の家へ歸つた後で、お玉が見付けて大騒動になつたんで

す」

まくし立てるやうに、横からお徳は説明しました。疳癪筋(かんしやくすぢ)が青黒い大年増は、恐ろしい達辯の持主で、しやべり始めるととめどがありません。

「舌を噛んだにしては、血が少ないやうだが」

平次は何よりそれが怪しいと睨んだのでせう。床の上にも、疊の上にも、夥(おびたゞ)しかるべき血の痕(あと)などは一つも殘つては居なかつたのです。

「皆んな拭(ふ)いてしまひました。この娘はよく屆く娘で――」

お徳はまたお玉を指しました。

「その時小屋に殘つて居たのは誰と誰だ」

「皆んな居た筈ですが、不思議なことに一人も居なかつたさうです。お玉は隣りの小屋の人を頼んで、緑町の家へ知らせてくれました。緑町へ歸つたばかりの私と主人が驅け着けると、其の邊で一杯引つかけてゐた傳六も、フラフラ歩いて居た萬之助も歸つて、間もなく皆んな顔が揃ひました。その時はもう戌刻半過ぎだつたでせう」

お徳はまた奔流のやうに捲し立てます。

「お前と百太夫とは、緑町の家へ一緒に歸つたのだな」

「いえ、私が先でした。小半刻ほどして主人が歸ると、間もなく小屋からの使です」

「傳六は何處で呑んでゐたんだ」

「横町の叶屋（かなふや）です。お訊きになればわかります。へえ」

傳六の鹽辛聲は、後ろの方から響くのでした。ガラツ八は早くもそれを確めに行つた樣子。

「萬之助は？」

「外をフラフラ歩いてゐたさうです。あの人は陽のあるうちは決して戸外（そと）へ出やしません。人立ちがして叶はないつて言ひますよ。だから、梟（ふくろう）みたいに夜遲くなつてから、フラフラと外へ出る癖があります。——あの身體ですものねえ」

一寸法師の萬之助が、日の光を嫌ふのも尤（もつと）もですが、さう言ふお徳の調子にはひどく小意地の惡い響がありました。

後は悉（ことごと）く狩り集めた臨時の男女で、此の事件にさしたる關係が

あるとも覺えません。
「お玉はズーツと小屋に殘つて居たのか」
「いえ、お玉は日が暮れると身體が明きます。ひと風呂樂屋(がくや)風呂を浴びて、酉刻(むつ)少し過ぎに緑町へ歸つたが、姉の歸りが遲いので、私と入れ違ひに戌刻(いつゝ)時分に迎へに來ましたよ」
「途中で小屋から歸る百太夫に逢つた筈だが――」
平次はこの複雜な人間の出入りを、頭の中で組織(そしき)立てて考へて居る樣子でした。
「お前は何時ものやうに相生(あひおひ)町から河岸ツ縁を歸つたらう」
今迄默つてゐた百太夫が口を容れました。
「いえ、松坂町の路地を拔けて來ました」

とお玉。

「さうだらう、俺は相生町から河岸ツ縁を歸つたが、逢はなかつたもの」

さう言へば成程そんなものでせう。

「ところで、小屋の中を見せて貰ひ度いが」

「へえ――、どうぞ」

百太夫が案内して、舞臺から客席、樂屋、風呂場と見せてくれます。

「贅澤な風呂場だな」

「時々は芝居の眞似事もしなきや、お客様が喜んで下さいません。へえ」

百太夫は極り惡さうに首筋を掻きました。その頃輕業小屋で芝居をすることなどは、嚴重な禁制だつたのです。

「風呂の蓋(ふた)にほんの少しだが血が附いて居るやうだな」

と平次。

「先刻、お銀のものをいろ〳〵洗ひましたが」

それは苦しさうな辯解ですが、平次は別に追及しようともしません。

三

近所の噂(うはさ)を掻き集めると、いろ〳〵の事が分つて來ました。第

一番に何と言つてもお銀の美しさが問題の中心で、一座の傳六が夢中になつて居ることや、百太夫までが變な態度をするので、女房のお徳が氣が揉(も)める話など、噂の種は際限もありません。

その中でお銀と仲の惡いのは一寸法師の萬之助だけで、これはどうせ相手にされないと分り切つて居るせゐか、お銀の機嫌を取らうとするでもなく、時々は一座の花形へ皮肉な惡戯をして、ひどく妹のお玉に怒られたりすることもありました。

「ところで親分、下手人(げしゆにん)があるでせうか」

歸る道々、ガラツ八はたまりかねて平次の脈(みやく)を引きました。

「お前はどう思ふ」

逆襲する平次。

「檢屍までもなく、あれは自害ぢやありませんね」
「その通りだよ。あの顔は自害した人間の顔ぢやない。自害した人間の顔は、どんなに惡相でも、觀念したところのあるものだ。――あの美しさで、あの凄い形相は――」
平次もさすがに固唾(かたづ)を呑みます。
「舌を噛んだといふのも變ですね」
「人間はあれ位のことぢや死に切れるものぢやない、第一いくらも血が出てゐないぢやないか――尤(もつと)も風呂の蓋(ふた)には少し血が附いて居たが」
「髮も濡(ぬ)れてゐましたね」
「あれに氣が付いたのか。尋常の濡れやうぢやなかつた。――耳

の穴を見たか」
「いゝえ」
「中に少し水が溜つて居た」
「へえ――」
「それからもう一つ、變つたことがあつた筈だ。氣が付いたか、八」
「さア」
ガラツ八の八五郎は頻りに首を捻(ひね)りましたが、此のうへ少しも思ひ當る節はありません。
「もう一度小屋へ歸つて見て來るが宜い」
「何を見るんで？」

「種(たね)を明かしちや、手品はつまらなくなるよ。何か變つたことがあつたら、それをとことんまで搜し拔くんだ」
「へえ――」
「俺は出直さうと思つたが、こいつはお前の智慧に任せよう。やつて見るが宜い」
「さア分らねえ」
「此處で首を捻(ひね)つたつて、何にもならないよ。もう一度あの小屋へ歸つて、檢屍に立會つて見るんだ」
「へえ――」
「念のために言つておくが、あの妹娘に氣をつけろ。お玉とか言つたな」

さう言ふ平次の背後姿を眺めて、ガラツ八は怨(うら)めしさう立つて居ります。

四

その晩。

「親分、分つたやうで少しも分らねえ」

ぼんやり歸つて來たガラツ八は、大袈裟(おほげさ)に腕などを拱(こまぬ)いて、平次の前へシヨンボリ坐るのでした。

「何が分つたんだ。先づそれから聽かうよ」

平次は何時になく膝などを乘出します。この報告が餘つ程待ち

遠しかつた様子です。
「死骸の着物は左前（ひだりまへ）に着せてあつたでせう」
「それだよ、八」
「檢屍の役人は何にも言やしませんよ。佛様の着物は左前に決つて居るんですね」
「それは經帷子（きやうかたびら）だ。お銀は死んだばかりで、まだ湯灌（ゆくわん）も濟んぢやゐない。舞臺で着る赤い振袖の襟を、左前に合せるのは變だらう」
「あつしもさう思ひましたよ」
「赤い振袖を左前に着て舌を噛み切るのは、何の禁呪（まじなひ）なんだ」
「それが分らないんで」

「お玉に當つて見たか」
平次は質問の方向を變へました。
「いろ〳〵訊いて見たが、あの娘は片意地だ。何にも言やしませんよ」
「本當に何んにも言はなかつたのか」
「たつた一と言、斯(こ)んなことを言ひましたよ。——何にも訊(き)かないで下さい、今晩中には何も彼も分ることですから——つて」
「今晩中には分る？　——本當にさう言つたか、八」
「それから、天道様(てんたうさま)は無駄には光らない、つて言つたやうで」
「困つたことになるぞ、八」
「何が困るんです」

「お前はこれから直ぐ兩國へ引つ返して、お玉を此處へ連れて來てくれ」

平次は大變なことを言ひ出しました。

「お玉をつれて來てどうするんです」

「何でも構(かま)はない、平次が話し度いことがある、とか何とか、宜い加減のことを言つて連れて來るが宜い。どうしても來なきや、十手に物を言はせるんだ。八五郎の懷中に、そんなものが伊達(だて)に突つ張つてるわけぢやあるめえ」

「やつて見ませう」

「人間一人の生命に關(か)はることだ、宜いか」

「大丈夫で」

八五郎は大きく胸を叩くと、もう一度兩國へ取つて返しました。

八五郎がお玉をつれて來たのは、それから一刻(とき)ほど經つた頃、やがて亥刻(よつ)近い時分でした。

「さア、素直に入れ。あんまり剛情を張ると、俺は十手に物を言はせなきやならねえ」

門口で又ひと揉(も)みするのを、

「八、手荒なことをしちやならねえ。お玉の心持は、俺にはよく分つてゐるつもりだ。氣の毒なことに、お銀に死なれてがつかりしてゐるんだ」

錢形の平次はそんな調子で手を取らぬばかりに、お玉を誘(さそ)ひ入れました。

派手な輕業（かるわざ）の太夫に似氣なく、汚（よご）れ腐（くさ）つた木綿の袷（あはせ）に、赤い帶を無造作に締めたその晩のお玉は素足に長刀草履（なぎなた）、髪も、形も、つくろはぬまゝに荒んで、激しい怒氣を含んだ顔には、日頃の美しさとは似てもつかぬ凄じい氣組が漲（みなぎ）ります。

「先づ其處に坐れ。――お靜、湯でも茶でも持つて來てくれ」

「――」

平次の穩かな調子にいくらか怒氣を挫（くじ）かれたものか、お玉はヘタヘタとしてその前に坐りました。

「それから、その匕首（あひくち）は俺が預かつて置かう。腹を立てて刃物を持つてゐるのは、決して宜いことぢやない」

「――」

お玉は平次の顔をジロリと見ましたが、言葉の柔かさに似ず、その表情の決然たるのを見ると、懷中から匕首(あひくち)を取出して、鞘(さや)ごと默つて平次の前に押しやりました。

「それでよし。——ところで、昨夜(ゆうべ)のことを此處で打明けて話して見る氣はないか。——それはいやだといふのか。金輪際(こんりんざい)打ち明ける氣はないと言ふつもりだらう」

「——」

頑固(ぐわんこ)に口を緘(つぐ)むお玉を、撫(なだ)めるやうな調子で平次は續けました。

「それぢや、俺が代つて話してやらう。——昨夜、姉の歸りが遲いので、お前は心配して緑町からもう一度兩國の小屋へ引返した

と言つたな。小屋へ行つたが、中には誰も居ない。百太夫夫婦も、傳六も、萬之助も、肝腎のお前の姉も見えない。お前は空つぽの小屋の中を捜して風呂場へ入つた、――と、風呂の蓋を半分ほど上げて、湯の中に人間が入つてる。見るとそいつはお前の姉のお銀だつた。お銀は死んでゐた」

「――」

お玉はゴクリと固唾を呑みました。

「少し舌を噛んで、口から血は引いてゐたが、それは風呂に入つてゐるところを、いきなり上から蓋をされて、苦しまぎれに噛んだ傷だ。お銀は風呂の中で溺れ死んでゐたのだ。――風呂の中で病氣を起して頓死をしたのなら、自分で蓋をしてゐる筈はない。

お銀を殺した下手人は、恐ろしく惡智慧のある人間だが、さすがに、人一人殺してあわてたと見えて、風呂の蓋を取るのを忘れて逃げたんだらう」

「――」

「姉の淺ましい姿を見ると、お前は夢中になつて風呂から引上げ、ろくに身體も拭かずに、其處にあつた赤い振袖を着せ、あの小部屋に抱いて來て、手當をしたが、お銀はどうしても生き還(かへ)らなかつた。そこでお前は、隣の小屋の留守番に頼んで緑町へ知らせてやつた」

「――」

「どうだ、それに違ひあるまい。――ところでお前は、姉を殺し

た下手人はよく分つてゐる筈だ。誰だ、それは」

「――」

お玉は相變らず頑固に默り込んで居ります。

「お前は匕首まで用意してゐる。――が、よく考へて見るが宜い。姉の下手人を殺せば、お上への言ひわけは立たない。姉の下手人が誰といふ、はつきりした證りが立たないのに、うつかりした事をすると、お前は唯の人殺しにされてお處刑になるかも知れない。――姉のお銀を殺したのは誰だ」

「證據がない」

ぶつ切ら棒に言つたお玉。その聲は悲しみと怒りに嗄れて、ひどく陰慘でした。

「證據がないばかりに、姉の下手人が分つてゐても、お上に引渡せない。それでお前はその下手人を殺さうと言ふのだな」

「――」

お玉はうなづきました。

「それは無法だ。若し間違つたらどうする」

「間違はない」

お玉は頑(かたく)なに頭を振るのです。

五

「それぢや此處で考へて見よう。證據がないと思ひ込んでも、下

手人は飛んだところに足跡（あしあと）を殘して居るかも知れない」

錢形平次は、お玉を相手に始めました。お玉はそれを輕蔑（けいべつ）し切つた樣子で、冷然と眺めて居ります。

「お銀を殺しさうなのは先づ四人ある。一人は口上（こうじやう）の萬之助、二人目は木戸番の傳六、三人目は主人の百太夫、四人目はその女房のお徳だ」

錢形平次は委細（ゐさい）構はず續けるのです。その前に八五郎はもう一度兩國へ樣子を見にやられ、平次の女房のお靜は、行燈（あんどん）の側へ來て、二人の話を氣遣ひ乍（ながら）、更（ふ）くる夜も構はず、何やら冬仕度の仕事をして居ります。

「――お徳は百太夫より半刻も前に緑町へ歸つて居る。風呂場で

お銀を殺す暇はない。お銀を憎んでゐることはお徳が一番だが、どう考へてもこれは下手人ではない。それから木戸番の傳六は、日頃お銀を追ひ廻して居たやうだが、輕業(かるわざ)がはねる前に身體が明いて、横町の叶屋(かなふや)で樽天神(たるてんじん)を極め込んでゐる。これは多勢の人が見て居るから、お銀を殺す暇はなかつた筈だ」

「――」

平次の系統(けいとう)立つた説明を聽くと、お玉の冷たい瞳が、次第に活氣を帶びて、頰は恐ろしい忿怒に燃えます。

「――殘るのは主人の百太夫と一寸法師の萬之助だ。萬之助とお銀は互に敵同士みたいに仲が惡かつたさうだ。萬之助は負け惜しみが強くて皮肉(ひにく)で、お銀の樣子が癪(しやく)に觸つてたまらなかつたんだ

らう。――美い女は大抵高慢(かうまん)で人を人とも思はない。お銀もさうだつた。――だがそれは表向で、萬之助の腹の中は、お銀が好きで〳〵たまらなかつた。萬之助は負け惜しみが強いから、自分の身體に耻ぢて、口にも出さず、素振りにも見せなかつたが、腹の中では毎日泣いて暮して居た。萬之助の日頃の様子――わざとらしい皮肉や意地惡や、先刻(さつき)お銀の死骸を見た眼の恐ろしい惱みは唯事ではない。その萬之助は、暗くなると、自分の心のやり場がないので、氣狂ひのやうになつて外を歩いた。昨夜(ゆうべ)も外を歩いてゐたといふが、誰にも逢つた様子はなく、誰も見た者はない。風呂場に隱れて居て、お銀を殺さないとは限らない」

「――」

「百太夫は主人だが、多分金づくで無理にお前達姉妹を、コキ使つて居るんだらう。傳六に訊くと、百太夫はお銀に無理な藝をさせようとしてゐたさうだ。若い女には、我慢の出來ない耻かしい藝だつたと思ふ。――それが嫌なら俺の妾(めかけ)になれと言つてゐたさうだ。これは傳六の言葉だが嘘(うそ)ではあるまい。お銀はそれを頭から斷り通してゐた。その上お前達姉妹が借りた金も大方返した筈だし、お銀とお前は近いうちに、あの蟹澤(かにざは)の一座から飛び出して、故郷の厚木(あつぎ)へ歸るつもりだつた。――その通りだらう。これはお徳に聽いたのだ」

「――」

「百太夫は死物狂ひになつて、お銀を引留めようとした。お銀は

どうしても聽かない。そこでフラフラ殺す氣になつた――どうだ、それも本當らしいだらう。それからお前が緑町から兩國へ引返したとき、どの道を通つたと訊いたのは百太夫だ。お前が松坂町の路地を通つたといふと、――俺は相生(あひおひ)町の河岸ツ縁を眞つ直ぐ歸つた、だから逢はなかつた――と言つた。實はあの時百太夫はお銀を殺して、まだ小屋の中でマゴマゴして居たのかも知れない。疑ひ(うたが)がかゝると困るとか何とか言つて、女房と口を合せて、大分前に歸つたやうな事を言つてるが、そんな細い(こまか)細工をするのは身に覺えのある奴に限つたことだ」

「――」

「何方だ、萬之助か、百太夫か、お前の姉を殺したのは？」

「證據がない」

お玉の答は相變らずうめくやうです。

その晩平次とお靜は殆(ほと)んど寢ずの番をさせられて了ひました。彈み切つた少女お玉は、兎もすれば飛び出して、兩國へ歸らうとするのです。

兩國へ還(かへ)つたら最後、その晩のうちに、もう一つ血腥(ちなまぐさ)い事件が起らずには濟まないでせう。若しそれが相手を間違つたとしたら、それこそ取返しのつかぬ事になるでせう。

運よくお玉の感が當つて、姉のお銀を殺した、本當の下手人を殺したとしても、證據がなくては言ひ分が立たず、この純情な娘は自分の命を棒に振るのが精々です。

大骨折の一夜は漸(やうや)く明けました。

「あツ、あの人が、何處かへ行つてしまひましたよ」

お靜の聲に驚いて、顏を半分洗つた平次は井戸端から家の中に飛び込みました。

「どうした、何處へ行つた」

そんな事を言つたところで追付きません。お玉は僅(わづ)かの隙(すき)を狙つて、逸(はや)り切つた奔馬(ほんば)のやうに、兩國へ驅け戻つたのでせう。

平次は直ぐ後を追ひました。が、輕業娘の輕捷(けいせふ)さには及ぶべくもなく、汗みどろになつて兩國へ辿(たど)り着くと、

「あツ、親分、大變ツ」

蟹澤(かにざは)の小屋の裏口に迎へたのはガラツ八の八五郎です。

「どうした、八」
「遲かつた、親分。到頭殺されましたよ」
「誰が、誰に」
ガラツ八を押しのける樣にして飛び込むと、一昨夜の慘劇(ざんげき)のあつた風呂場の流しに、これは着物を着たまゝの百太夫が、紅に染んで死んでゐるではありませんか。
その側に呆然(ぼうぜん)と突つ立つてゐるのは、なんと、ツイひと足先に此處へ來た筈のお玉。
「お玉、何といふ事をするのだ」
「親分、私ぢやありませんよ。でも、姉を殺したのは此奴です、私にはよく分ります」

百太夫の死骸を指すお玉には、何のうろたへた様子もなかつたのです。

「親分、百太夫を殺したのは、お玉ぢやありませんよ。あの一寸法師ですよ。萬之助の野郎ですよ」

「？」

錢形平次はガラツ八の言衆を、夢心地に聽きました。江戸開府以來の名御用聞も、この時ほど馬鹿々々しい思ひ違ひをしたことはなかつたのです。

×　×　×

間もなく萬之助の死骸は、兩國橋の下から揚(あが)りました。お銀の怨(うらみ)を晴した純情の一寸法師は、自分から身を投げて死んだことは

言ふまでもありません。

「今度ばかりは親分も見當違ひをしたでせう。百太夫を殺したのをお玉と思ひ込んだ親分の顔は、全く忘れられませんよ」

ニヤニヤするガラツ八です。

「全く一言もないよ。それといふのも、最初お銀を殺したのが、百太夫か萬之助か、どうしても分らなかつたせゐだ。——だが萬之助はあの通り身體が小さいから、たとへ女一人でも、風呂へ入つてるのを上から蓋(ふた)をして、死ぬまで押へて居る力はない。それに氣が付かないばかりに、ひと晩無駄な苦勞をしたよ」

「へえ。——親分でも氣のつかない事があるんですか」

「だがな、八。俺にも隱してある役札がもう一枚あるよ。それは、

大した事ぢやないが、お玉は女ぢやないと看破(みやぶ)つたことさ」
「へえツ、冗談ぢやありませんか、親分」
「あれは確(たし)かに男だ。――十六かな、十七位かな、兎に角女の子ではない。女の子なら人形遊びで馴(な)れてゐるからどんなにあわてても左前に着物を着せる筈はない。それにお玉は綺麗ではあるが男顔だ。多分百太夫の智慧だらうと思ふが、男の子を女に仕立てて、激(はげ)しい藝をさせて人氣を取つたんだらう。それにお銀ときやうだいといふのも嘘(うそ)だらう、顔がまるつきり似てゐない」
お玉の激怒の中には淡い戀の潜(ひそ)んでゐるのを平次は見逃さなかつたのです。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十八巻　彦徳の面」同光社磯部書房
　　1953（昭和28）年10月20日発行
初出：「文藝讀物」文藝春秋社
　　1943（昭和18）年12月号
※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2016年3月4日作成

2017年3月4日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控
お銀お玉

２０２０年　７月１３日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/